

厚生労働省
保険局保険課
課長補佐

柴田直慧さん

森田助産院
日本助産師会 副会長
今村理恵子さん

特定非営利活動法人
manma 理事

新居日南恵さん

座談会 厚生労働省提供企画

出産施設と妊産婦をつなぐ「出産なび」

「その人らしいお産」ができる場所を選ぶ第一歩に

女性が出産施設を選ぶとき、限られた時間で、自分に合った施設を見つけ出すのは容易ではありません。施設側にとっても、女性に情報を届ける手段が少ないことが長年の課題でした。

こうした課題を解決するために、2024年5月より厚生労働省が提供を開始したのが、全国の出産施設の費用やサービスを比較検討できるウェブサイト「出産なび」です。2026年2月には、より利用者のニーズに応える形でリニューアルされました。

本企画では、「出産なび」の開発を主導した厚生労働省の柴田直慧さん、若者のライフプランニングを支援し、自身も産院選びに苦労した経験を持つ新居日南恵さん、そして長年、開業助産師として多くの妊産婦に寄り添ってきた日本助産師会副会長の今村理恵子さんをお招きし、それぞれの立場から出産施設選びの現状と、「出産なび」の可能性について語り合っていました。

提供：厚生労働省 写真：刑部友康 構成：編集室

妊婦が直面する出産施設選びの困難

新居 私の産院選びは、妊娠の確定診断を受けた病院で「次の健診までに産む場所を決めてください」と言われたことが始まりでした。その病院は出産を扱っておらず、人気のある施設はすぐに予約が埋まってしまうため、妊娠が分かってから2〜3週間で決めなければならませんでした。

私は無痛分娩を漠然と希望していました。が、無痛分娩のメリット・デメリットや、計

画無痛分娩を行う施設とそうではない施設の違い、麻酔が効かない可能性などのリスクについて当時は全く知りませんでした。出産について相談できる友人は周囲におらず、妊娠超初期ですから親にも会社にも言えない段階で、インターネットの情報だけを頼りに一人で探しました。

特に東京は選択肢が多く、例えば自宅から1時間の範囲に何十もの施設があります。

「無痛分娩 ○○区」と検索してやっと10ほどの施設に絞ることができました。しかしそれぞれのウェブサイトを訪れても、情報の一覧性がなく、部屋の雰囲気や食事の写真を見たり、断片的な口コミを探したり。正直言ってレストランやホテルを選ぶのと大して変わらないような状況でした。出産費用も、結局いくらかかるのか分かりづかったです。結局、何を優先すべきか、確固たる判断基準がないまま決めてしまったのが実情です。だから予約金を支払った後も、「自分の判断は正しかったのか」という不安が残りました。

今村 新居さんがお話しされたような産院選びの困難は、今に始まったことではなく、昔からずっと言われ続けてきました。人気の施設は妊娠検査薬で陽性が出たらすぐに予約し

なければ埋まってしまうですが、そうでなくとも「妊娠6~9週までに決めてほしい」という産院もあります。結婚や妊娠を機に引越しをされることもあると思いますが、土地勘がないと住所を見ても通いやすい場所かどうか分かりません。

理想を言えば、妊娠する可能性のある方が、妊娠前から、ご自身がどんなお産をしたいのかを考え、選択肢を持っておくことが望ましいのです。しかし現実にはなかなか難しい。助産師から情報提供をしたくても、母子健康手帳を受け取る時には、すでに産院を決めている方がほとんどです。最適なタイミングで情報を届けるにはどうしたらいいかということは、私たち助産師にとっても、長年、非常に大きな課題でした。

施設選びに不安を抱える妊婦に、必要な情報を届けたい

柴田 「出産ナビ」開発の出発点は、出産費用に関する情報を整理したいという政策的な課題でした。しかし、単に数字だけを並べても意味がありません。「どういう情報が妊婦さんに必要とされているのか」というところから始めなければいけないと考えました。そこで私自身、多くの妊婦さんや出産後間もない方々にお話を聞いていきました。

すると、妊婦さんが直面するいくつかの「壁」が見えてきたのです。まず、新居さんのお話にもあった「時間の壁」。誰にも相談できず、タイムリミットが迫る中で一人で決断しなければならないことは、焦りや不安につながりますよね。それに、どういう情報に基づいてどういう判断をすればいいのか、何が正解か分からないという「知識の壁」も、不安を掻き立てます。そして、必要な情報がどこにあるのか分からず、たどりつけないと

いう「アクセスの壁」もあります。

これらの不安をどうしたら軽減できるだろうと考えた結果、「出産ナビ」では、各施設がどのようなお産を行い、どのようなケアを提供しているのかを、統一されたフォーマットで一覧できることを目指しました。もちろん、サイトの情報だけですべてが完結するわけではありませんが、施設選びの最初の「とっかかり」として役立つものになればと考えました。

また、開発にあたってはお母さんの声だけでなく、出産施設の皆さんの声も重視しました。妊婦さんが関心を持ちやすい情報と医療者が伝えたい情報との間には、往々にしてズレがあります。「出産ナビ」では、医療安全や地域の連携体制など、専門的な情報もきちんと掲載することで、妊婦さんのリテラシー向上にも貢献したいという思いがありました。



出産ナビ

- ・地域やサービスの条件を設定して、出産を取り扱う病院、産科/産婦人科クリニック(診療所)、助産所(助産院)を検索できる
- ・それぞれの施設について、「施設の情報」「助産ケア」「付帯サービス」「費用」の詳しい情報を掲載
- ・妊娠中から産後に使える制度が一覧化されている

<https://birth-navi.mhlw.go.jp>



◀リニューアルしたトップページ。駅・路線や現在地から検索する機能が追加されている。



▲検索結果を地図で一覧表示できる機能も。

妊婦のニーズに応えたリニューアルで、さらに使いやすく

柴田 「出産ナビ」は、利用者の皆さんと一緒に育てていくサイトだと考えています。その一環として、2026年2月にリニューアルしました。大きな変更点の一つは、スマートフォンでの閲覧に最適化し、より見やすいデザインになったことです。

機能面では、検索方法が大きく拡充されました。これまでの市区町村単位の検索に加え、「駅・路線」や「現在地」からも探せるようになりました。また、「個室あり」「希望による無痛分娩」といった詳細な条件での絞り込みも可能です。

さらに「お気に入り機能」で、候補となる施設をリスト化し、じっくり比較検討できるようになりました。これらの改善は、サイトに寄せられた利用者の声を反映しました。

新居 このリニューアルは素晴らしいですね。特に、自宅などの現在地を中心に、地図

上で視覚的に施設を探せるようになったのは画期的だと思います。「通勤ルートとは違うけれど、実はこんなに近くに産める場所があったんだ」という発見にもつながります。

今村 路線図から検索できるのも、とてもいいですね。市区町村の境目に住んでいると、隣の市のほうが近いことがよくあります。リニューアルによって、より生活圏に即した施設探しが可能になったと思います。

新居 サイトが提供する情報の見せ方にも期待しています。医療の専門用語などは、専門家以外には「暗号」のように見えてしまいます。今後、専門家の方が「こういう項目をチェックすれば安全性が分かりますよ」と解説するようなコンテンツが加わると、私たち妊婦も情報を正しく理解したうえで選べるようになり、非常に心強いです。

専門家による発信や対話の必要性は変わらない

今村 ただ、サイトに掲載されている数字やデータだけですべて判断できるわけではない、という点は強調しておきたいと思います。例えば、NICU(新生児集中治療室)の有無だけで施設を選んでしまうと、大規模な周産期医療センターに選択肢が偏ってしまう可能性があります。しかしその人の状況に合った施設は、本当にそこなのか。お産は、どの医師や助産師に当たるか、そのときのご自身の心身の状態など、多くの要因に左右される非常にパーソナルな体験です。

だからこそ、「出産ナビ」はあくまで入り口だと捉えることが重要です。そして、もし「この施設とは合わないな」と感じるものがあつたら、その施設の医療者に気持ちを伝

え、話し合ってほしいです。最終手段として、産む場所の変更もできます。現実問題として、妊娠中期を超えると施設変更は簡単ではなく、予約も取りづらくなるため慎重に検討すべきではありますが、ご自身が納得できる施設を選ぶ自由はあるのです。

柴田 今村先生がおっしゃる通り、「出産ナビ」は費用やデータだけで出産施設を選ぶツールではなく、あくまで情報収集のハードルを下げるのが目的です。最終的には、医師や助産師さんと直接お話しして決めるというプロセスは、これからも変わらず大切です。「出産ナビ」の役割は、そのための時間を確保できるように、妊婦さんの不安に寄り添い、情報収集をサポートすることなのです。

妊娠前から産後まで、切れ目のない支援と情報のハブを目指して

柴田 将来的には、「出産ナビ」が妊娠前から産後までを網羅する「情報のハブ」となることを目指しています。今後は、妊婦健診や産後ケアに関する情報もこのサイトで一元的に検索できるように準備を進めています。

また、専門家によるコラムや、行政の支援制度の情報も充実させ、「ここを見れば、妊娠・出産に関する必要な情報が分かる」というサイトにしていきたいです。

今村 満足のいくお産は、その後の育児に非常によい影響を与えます。お母さん自身が「自分で選んだ」という納得感を持つことが、子育てへの自信につながるのです。その意味で、「出産ナビ」が、妊娠する前から自分の将来のお産について考え、主体的に選択できるようなサイトに発展していくことを大いに期待しています。

また、産後ケアについては、単に「体を休める場所」ではなく、「家に帰ってからの育児をスムーズに始められるように、必要なスキルを学ぶ場所」という本来の役割が伝わる情報発信ができればと思います。

柴田 そのためには、プレコンセプションケアなどの場面で、「出産ナビ」の存在をより早い段階で知っていただく必要があります。学校での性教育や、企業での健康診断といったさまざまな機会を通じて、情報を届ける方法を模索しています。

安心して安全に、そして何よりも満足できるお産をすべての人が迎えられるように。そのゴールに向けて、「出産ナビ」はこれからも皆さんの声に耳を傾け、進化を続けていきたいと考えています。

J

(2026年1月5日収録)